皆様

ロシア当局に拘束されている、北海道新聞の今井裕紀記者の妻、今井のぞみと申します。彼の両親と共に夫を案ずる日々が続いております。

この間、多くの皆様からご心配と励ましの言葉を頂戴し、心強く感じております。心から感謝申し上げます。

10月13日。2年間の特派員の任期を終えた夫が帰国に向けてユジノサハリンスクを発つ日でした。北京を経由し、14日に羽田空港に帰ってくるはずでした。

夫はこの日を心待ちにしていました。任期中に産まれた1歳9か月の娘のことを、目に入れても痛くないほどに可愛がっていて、14日は早速、「保育園のお迎えは自分が行きたい」と意気込んでおりました。

しかし、13日の朝から胸騒ぎがしていました。夫は「お土産足りているかな」「パッキング終わったよ」「今から空港に向かうよ」「空港に着いたよ」「飛行機に乗るよ」

と，折々で連絡を入れてくれる人です．それなのに，一切連絡が取れなくなってしまったのです．しきりに電話をかけてもつながりません．「さすがに飛行機には乗っているよね」と祈るような思いでいたところ，拘束の一報が入りました。

連行される夫の姿を映した動画を見ました。
息ができなくなり，心がズタズタに引き裂かれる思いがしました。大切な家族が後ろ手に腕を縛られているのを見て，冷静でいられるはずはありませんでした。動画で映し出されたスーツケースの中には，私たち家族へのお土産も映り込んでいました。一晩中まんじりともせず，朝を迎えました。
現実のことだと思えず，涙も出ませんでした。

◇

ロシアは私たち家族にとって特別な国であり続けてきました。

夫はずっと，本人の祖父が生まれ育った樺太（サハリン）に，

自分のルーツのひとつがあると感じていたようです。そのことが影響しているのか、日露関係やロシアについて人並み以上に関心を持ち、一生懸命に学んできました。

「どうしてもロシア語を勉強したい」と、両親に頼み込んで浪人し、5年半にわたって在籍した大学では、図書館にこもってずっとソ連の映画を見続けていたそうです。

留学したサンクトペテルブルクについては「夢のような場所」と話していて、プーシキンの「青銅の騎士」は何度も読み返していました。夫はそんな特別な街で、いつか家族で一緒に旅をすることを夢見ていました。

北海道新聞に入社後は、根室・釧路・東京と、勤務地を変えても、その往来にあるロシア語の教室に通い続けました。ロシア語を学ぶことは喜びそのものだったのだと思います。

ビザなし交流で根室を訪れた四島の島民をホームステイで受け入れたこともあります。夫は、そのときの写真を大切にしていました。根室の古いアパートの一室で、みんなが食卓を囲んで、微笑んでいました。

私と夫を結びつけたのもロシアです。学生時代に友達になったのも，「ロシア文化が好き」という共通点があったからです。

会うたびに，私たちは最近見たソ連やロシアの映画や，最近読んだロシア人作家の小説について語り合いました。ドライブをすると，ヴィクトル・ツォイの歌声や，デニス・マツーエフの力強いショスタコーヴィチの演奏が車内に流れました。私たちは，居酒屋でビールやウィスキーを飲みながら，マヤコフスキーの詩や，カンディンスキーの絵について語り合いました。

私たちの結婚記念日は9月25日，ショスタコーヴィチの誕生日です。だから，私たちが結婚を祝うときは，彼の生誕も祝うことになります。

昨年9月には，私は生後半年の娘を連れて，ユジノサハリンスクに行きました。夫は，娘の初めての海外旅行がロシアだったことにとても喜んでいました。夫は子供用品店でたくさん買って準備してくれていました。

ベビーカーに乗せた娘と3人でユニバーサルスタジオを歩いていると、夫は「ずっとこんな時間が続けばいいのに」と言いました。娘を連れて、海や動物園、博物館など、様々な場所に行きました。家族のかけがえのない思い出になりました。

こうして任期を終え、送別会では、離任の挨拶として、こんなことを話したんだ、と私に教えてくれました。

「娘にも、日露の架け橋になるような仕事をしてほしいと思っています」

◇

夫が拘束されてから一か月余りが経ちました。家族はあれから悲しみのどん底にあり続けています。

9月に一時帰国した際、夫が組み立ててくれたアンパンマンのおもちゃは、娘のお気に入りになり、一人でトイレに行けるようになりました。

言葉も飛躍的に増えました。暗い廊下の先を見やりながら、「パパ、いないねー」と言うようになりました。「やだ、やだ」と反抗しながら、いろんなことを一人でやってみようと挑戦しています。嬉しくもありますが、「パパがいたら、きっと手を叩いて喜んだろうに」と、成長を夫と喜べないことが、悲しく、寂しいです。　子どもが育っていくかけがえのない時間は、もう二度と巻き戻されることはありません。クリスマスも、お正月も、娘の2歳の誕生日も、パパは立ち会えないかもしれません。

夫の年老いた両親も、「自分が死ぬまでに、大切な一人息子とまた再会できるのか」と深く懸念しています。医師からくも膜下出血のリスクを指摘されている義母は「刑務所の前で座り込んで、自分を身代わりにして欲しいと叫びたい」と泣きながら話していました。

今井裕紀記者は，私たち家族の大切な息子であり，夫であり，父親です。

小さな娘に，どうか大切なパパを返してください。

早期解放のために，皆様方のお力添えをどうかお願いいたします。

2026年11月26日

今井 のぞみ